



まず現状のリアルな認識を

尾崎 芳 治

図書館にかぎらず、なにを改革するにもまず必要なのは、現状のリアルな認識である。リアルなというのは、たんなる物品や設備や人員の正確な調査ということではなくて、図書館の機能を実際に担っているのは関係職員であり教官であり学生だから、これらの人びとが現実を感じている問題や要求にリアルな認識ということである。

手近な例をとろう。経済学部には約26万冊の蔵書があるが、学部創設以来いまだにこの龐大な蔵書にみあう学部図書館の設置が認められないため、収蔵は6カ所に分散している。学生の閲覧用座席は、スペースの不足から、文部省基準という学生数の20%相当はおろか2%にも満たない。職員は、わずか15名のうち1/3は臨時職員である。ところで、こうした点にかんする数量的調査は、文部省の手でこれまでもなにか行なわれてきた。しかし、かつて一度もさきほどの意味でのリアルなものになったためしはない。醒めた数量的事実のうしろにある生きた人間の声をきく姿勢もきかねばならぬ制度的枠づけもないからである。

実際には、スペースと職員の絶対的不足は、致命的な問題を生んでいる。保管と利用は、「ズタズタ」となっていて、図書室は、学生にとって「行っても手に入らず読めず読む気もしない」ところ、職員にとっては「来られたら困る」ところとなっている。教育の機関としての図書の機能は、ほとんど死んでいるのである。実は、最近学生代表が、学部図書委員会に加わるようになって、広く学生の意見を聴取しようとしたとき、初めにほどの要求も出なかった。ほとんど利用したことのない人間に具体的要求をもてるはずがなかったからである。「要求なし」の背後に要求がかくされていることが、今ようやく明らかになりつつある。他方職員は、その日その日の受け入れと整理だけでせいっぱいである。図書の仕事は永年にわたって積み上げていく性質のものだから、この状態は、ときにとりかえしのつかぬ問題を累積させ、大混乱を招く危険をはらんでいる。さらに、本来図書職員は、その相当部分がたんに「図書を取り扱う人」でなく「図書を知っている人」からなっていなければならないのに、これでは書誌専門家の養成も自己研修も全く問題にならない。この点は、現在図書の業務が、机や椅子なみの物品管理と同一視されているという根本理念の問題にもかかわっている。研究の協働者であり学習の助言者でありそれにふさわしい自主権をも与えられている職員をもつ図書館の存在を考えてみれば、現状は研究のための機関としても半ば死んでいることがわかる。勤務条件にかんする図書職員の要求のなかに、図書館の、ひいては大学の研究・教育機能の、根本的革新のための大きな力がかくされている、といってよいのである。

教官の要求とならんで職員と学生の声を改革の力に加えるために、各学部図書委員会と図書館商議会を、職員、院生、学生の各代表に開放するのは、改革にまず必要な一つの具体的行動ではあるまいか。

1969.12.25

(経済学部助教授)